

こちらを向いているのはトム・マックスウェル。アロナーといっしょに釣りに行った際のカット。1998 年撮影。マックスウェルはこの写真撮影後まもなく他界した。



American Bamboo Rod Builder Stories ①



Mark Aroner マーク・アロナー 〃神の贈り物、を受け取った苦労人

text Todd E. Arai Larson
タッド・ラーソン／シンシナティ州／ホワイトフィッシュ・プレス
訳 永野竜樹
ながのたつき／東京都

レナードで働いた数少ない現役ビルダー、マーク・アロナー（63歳）。
そのロッドはきわめて美しい仕上がりで、高いキャスティング能力で知られる。
しかし、アロナーの現在までの道のりは、平坦なものではなかった。

〈編集部より〉
タッド・ラーソンはオハイオ州・シンシナティで出版社ホワイトフィッシュ・プレスを経営する大学教授(41 歳)。シンシナティのザビエル大学で歴史を教えている。世界最大のバンブーロッド・コミュニティ「Classic Rod Forum」管理人であり、現役ビルダーたちの消息にも詳しい。本稿は『フライの雑誌』のためにマーク・アロナーへ新たにインタビューしての書き下ろし。今後、著名ビルダーへのインタビュー記事を定期的に小誌へ寄稿予定。
予定ビルダー：ベア・ブランディン、ハル・ペーコン、ダナ・グレイ、ジェフ・ハットンなど。



Photo By Izu Kenro

フライフィッシングほど歴史と結びつくスポーツは他にないだろう。

フライタイヤーであれば、キャッツ・キルの伝統に則してフライを巻いていると言うだろうし、リールメーカーなら、自分たちの仕事は見てのとおり、ヴォンホフ・スタイルの歴史を継承していると言うだろう。

このような伝統との結びつきは、ロッドメーカーにおいてこそ顕著であると言える。

なぜなら、現代のバンブーロッドビルダーの誰しもが、ポール・H・ヤングやライル・ディッカーソン、あるいはジム・ペインのような偉人たちが作り上げた一連の「クラシック・テーパー」を称え、推奨するからだ。

マーク・アロナーは、そんなバンブーロッド黄金時代からの系譜に直接繋がる、数少ない現役のロッドメーカーだ。その系譜に繋がっているという事実だけでも、多くのフライフィッシャーマンたちに何か特別な感情を抱せる。

1

グラスロッドの全盛期に

アロナーは、モンタギュー・ロッド&リール・カンパニーとその後継であるスウェル・ダントン社双方の血を引くトーマス&トーマス社で、バンブーロッドの製作を始める。

その後独立するまでは、かの伝説的なハイラム・L・レナード社に勤めていた。そして現在、彼のスピノザ・ロッド・カンパニーは、かつてレナード社で使われた設備をそのまま使用して、現代を代表する素晴らしいバンブーロッドを世に送り出している。若かりし頃のアロナーのバックグラウンドを見ても、彼がロッドビルダーの道を歩みだす直接的な動機は見出せない。

子供時代に少しは経験があったものの、アロナーが本格的にフライフィッシングへ入れ込むようになったのは、マサチューセッツ大学に通うようになってからだ。彼は大学で芸術教育の学位を取得している。

それはまさに、グラスロッドの登場に押されてバンブーロッドが絶滅に瀕していた、1960年代のことだ。質の高いバンブーロッドを提供するレナードやオービス、それにわずかなメーカーが生き残っているに過ぎない時代であった。

面白いことに、アロナーが最初に手にしたバンブーロッドはイギリス生まれのシャープス・オブ・アバディーン製である。メーローダー専門のハーターズのカタログなどを經由して販売されていた安価なものだった。こう見ると、彼のバンブーロッドの世界への第一歩は、決して華々しいものではなかった。

スウェル・ダントンとの出会い

アロナーがある日釣りをしているとき、シェークスピア製のワンダーロッド（グラスロッド）の穂先を折ってしまった。ここから全ての物語が始まる。修理先を探していた学生のアロナーに、マサチューセッツ州グリーンフィールドに住む年配の紳士が、役に立てるかもしれないと話しかけた。紳士の名はスウェル・ダントン、ロッド製造に身を長く置いてきた人間だった。

1926年、当時世界最大のバンブーロッド製造業者であったモンタギュー社は、ダントンにロッド工場のリストラを依頼した。1950年代の半ばになり、ダントン自らがモンタギュー社を買収するまで、彼は同社で様々な要職を務めた。この買収により、ダントンはロッド製造に関する機械設備類を全て手にしたばかりでなく、トンキンケーンの巨大な在庫を手中に収めた。

トンキンケーンの豊富な在庫は、モンタギュー社にとって計り知れないほどの価値をもたらした。なぜなら中国との通商禁止により、その後何10年もの間トンキンケーンの輸入が禁止されたからである。

アロナーは当時を振り返って言う。「1970年代初頭ですら、トンキンの在庫はまだ豊富だった。エレベーターの昇降路にまで積み上げられて

いたほどだ。」

トーマス&トーマスへの就職

1972年、ダントンはトム・マックスウェルとトム・ドルシーの二人組に、ロッドショップと機械設備一式を売却する。義兄弟である二人は、1967年頃からバンブーロッドの修理などを行っていた。

アロナーは二人に出会った時のことを、はっきりと覚えている。「第一印象はビートニックスかと思った。二人のやっていることがとてもかつこよく目に映ってね。もちろんトム・マックスウェルとトム・ドルシー二人のことだよ。」

二人に惹かれたアロナーは、ロッドショップへ頻繁に出入りするようになる。そして1972年のある日、ここで採用してもらえないかと衝動的に切り出した。数日後には面接の電話があり、その結果アロナーは新生トーマス&トーマスに就職する運びとなった。トーマス&トーマスが1970年代のバンブーロッド・ルネッサンスの先駆となったのは、よく知られている通りだ。

このようにして、マーク・アロナーはロッドメーカーになった。

バンブーロッドは息を呑むほど美しい

アロナーはビルダー見習いから、